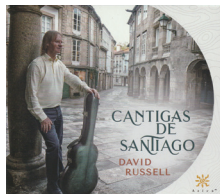




# 外盤 案内

I M P O R T D I S C

Ⓒの表示のあるCD、DVDは、現代ギター社通販サービス及びGGショップで取扱い中、または取扱い予定の商品です。



## Cantigas de Santiago ラッセル

Cantigas de Santiago  
David Russell (G)  
Azica Records ACD-71335  
アメリカ盤

●ラッセルは現在ガリシア（ニ格蘭）に住居を定めているが、ガリシアの州都のサンチャゴ・デ・コンポステラへの道を意識したアルバムである。ゴスの作品は中世の3つの作品、《聖母マリアのカンティガ集》、《カンティガ・デ・アミーゴ》、《クリストゥス写本》から選ばれた7作品をゴスが現代風に色付けして一種の組曲にしている。とはいえゴス独特のオリジナルを活かした響きとゴス風の音楽のバランスは絶妙であり、中世と現代をつなぐコンポステラへの道を感じさせる。ダンの作品はラッセルとの友情の作品か、終楽章の〈スコットランドの舞曲〉はラッセルも楽しんで演奏している。アサドの3曲の献呈作品はアサドが現在取り組んでいる肖像シリーズから選ばれている。〈デイヴィッドの肖像〉はもちろんラッセルに献呈された作品であり、曲中にラッセルの家族の名前を巧みに取り込み、アイルランド風のジグとガリシアの舞曲ムニュイラのリズムミクな雰囲気まで纏めている。

[サンチャゴのカンティガ集（ゴス）、ランドマーク（ダン）、エリ（イライ）の肖像、サンディの肖像、デイヴィッドの肖像（アサド）]

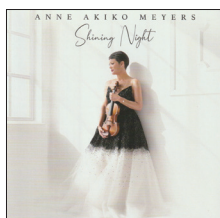


## Magna Carta 楊

Magna Carta  
楊 雪霏\* (G), Johannes Moser\* (Vc), Clark Rundell\* (C), Royal Liverpool Philharmonic Orchestra\*  
Primaface Ascrecords PFCD184  
イギリス盤

●イギリスのブラニングのギター作品集。ギターソロや弦楽四重奏との室内楽作品もあるが、それらはオーケストラとの協奏作品としても編曲されており、このアルバムはブラニングのすべてのギター作品が収録されている。ブラニングは若いころの海賊ラジオでのパーソナリティなどで有名であるが、作曲家としても保守的というか耳に馴染みやすい作品を生み出している。この《マグナカルタ》は大憲章制定800年を記念して楊のために作曲された。トレモロなどギターの技法が込められた第3楽章のカデンツァを含め4楽章の協奏曲の構成をとっている。民謡の旋律なども取り込んだ親しみやすい協奏作品である。《5つのロマンス》はもともとギターソロなど別々の作品であったが、今回ギターと弦楽の協奏作品として再構成された。ブラニングの思い入れの感じられる個々のタイトルと共にそれぞれが弦楽との協演として楽しめる。楊はこれらの作品の成り立ちも含め十分に理解した演奏である。

[マグナカルタ協奏曲\*、5つのロマンス\*、ラクリモサ#（ブラニング）]



## Shining Night ヴィオー

Shining Night  
Jason Vieaux (G), Anne Akiko Meyers (Vn)  
AVIE Records AV2455  
オーストリア盤

●これはマイヤーズのヴァイオリンアルバムであるが、ヴィオーのギター伴奏による演奏がほとんどであり、演奏自体も刺激的な1枚になっている。アメリカのギタリストでもあるボクソンの編曲が多いが、マイヤーズ／ヴィオーからの信頼もあるであろう。コレリリの表現はヴァイオリンに活躍の場を与えており（どこかヴィヴァルディ風でもあろうか）今までとはちょっと異なった雰囲気、一方バツハではギターの伴奏が凝っている。バガニーニでもそうであるがマイヤーズのガルネリの高音の伸びと共に特に低音の厚みは聴きものである。エリントンやプレスリー（好きにならずにいられない）のようなポピュラー作品も二人の演奏はなかなかシックな表現（マルティーニを意識している所もあろう）。一方、ピアソラではヴィオーは古くからフルートとの共演も行っており手慣れたものである。とはいえ、演奏の構成はマイヤーズ主導か、ヴァイオリンの個性がよく出ている。

[フォリア（コレリリ～ボクソン）、アリア（バツハ～ボクソン）、カンタービレ（バガニーニ）、アリア～ブラジル風バツハ第5番（ヴィラ＝ロボス）、イン・マイ・ソリチュード（エリントン～ローザ）、タンゴの歴史（ピアソラ）、好きにならずにいられない（ベレッテ／クレアトレ／ヴァイス～ボクソン）、大きなセコイアへの讃歌（ブローウェル）]



## Modernismo Italiano バスキエラ

Modernismo Italiano  
Alfonso Baschiera (G)  
Da Vinci Classics C00576  
日本／イタリア盤

●イタリアの20世紀のギター作品の副題のもと、前衛音楽への傾倒ではなく、調性感は維持しつつモダニズムとイタリア古典を結びつけた世代のギター作品をまとめたアルバム。演奏はイタリアギター界で息長く、幅広く作品の発掘や演奏を行なっているバスキエラである。このアルバムの特徴の一つは作曲家がギタリストではない所にもあると思われる。楽器の制約にあまり拘らずに自身の表現を示している。マリピエロはやはりそのリズム感が聴きどころであろうか。バスキエラは一種諧謔的な色合いも上手く表現している。ロゼッタの〈ソナチナ〉に表現された移ろいゆく音色の変化はその透明感のある和声を背景に音楽と共に楽器の美しさも感じられる。バルビエリの花の名前を冠した前奏曲～組曲は短い曲の組み合わせながらなかなか美しさ溢れた曲になっている。先月号でも紹介したヴィオッジも含め、この時代には隠れた佳曲が案外埋もれているのかもしれない。

[前奏曲（マリピエロ）、協奏風練習曲（ゲディーニ）、ソナチナ（ロゼッタ）、温室～7つの前奏曲（バルビエリ）、ファンタシア、ソナタ（ヴィオッジ）]